カナダの都市

——「住みやすさ」文化への貢献

熊谷直勝

ここにひとつ、カナダの地図がある。何やら不思議な鳥の形をした地図だ。これを眺めていると、一瞬この〝鳥〟が、宇宙のいずこへ舞いあがるのか、といった思いにとらわれる。

この地図は、一九七二年、サイモン・フレーザー大学と、ブリティッシュ・コロンビア大学が共同開発した地図、アイソデモグラフィック（等人口統計学地図）である（注1）。この生態的ともいえる地図は、国勢調査を行う統計単位面積を基礎に、人口を比例的に算出し図示する方法で、人口の多いところはそれだけ面積がふくらむことになる。したがって、都市は、バンクーバー、トロント、そしてモントリオールという風に、あきらかにクローズアップされたエリアとして目にすることができるのである。

モントリオールは、いっぱいに食物をとりこんだ鳥の胃袋であり、トロントはふくらみのある胴体、そしてバンクーバーは羽根の先をつかさどり、その先端がビクトリアである。これらにまたがるようにして、羽根のところにエドモントン、カルガリー、サスカトゥーン、レジャイナ、羽根のつけ根に大きくウィニペグがある。胴体からしっぽにかけてハミルトン、ロンドン、ウインザー等。そしてくちばしの上がセント・ジョンズ、下がシドニー・グレース・ベイ、ハリファックス、あごのところにセント・ジョン等で、プリンス・エドワード島のシャーロットタウンは、このくちばしに見える舌のような感じだ。頭のところはむろんケベック・シティー、そして胃と胴にはさまれた心臓のところがオタワで、それぞれの都市みなが象徴的な配置になっていて印象的である。

カナダのイメージの中に、バンクーバー、トロント、そしてモントリオールの三都市が極めて大きな地位を占めて登場してくることはいうまでもない。

モントリオールの住宅街。カナダでは各地で人間中心のコミュニティづくりが進んでいる。

「ほっとする」カナダの都市

カナダ人にとって都市とは何なのだろうか。旅行、仕事、里帰りなどをおえて自分の街にもどるときの心情に、何か積極的なものはないのだろうか。とりわけアメリカからカナダに帰るときに見うけられるカナダ人の表情には、なぜかほっとしたものがある、といえばおおげさだろうか。このことをカナダ人に尋ねたときにかえってくる答えは、皆一様に、カナダの街は「住みやすい」からだというのである。

モントリオールに帰れば、あのプラスや地下街が、冬の寒さをやわらげてくれ、はなやかな北のイメージを誘らし気に語りたくなる人もいる。トロントへの帰路、空港からバスで地下鉄へいそぎ、ヤングでのりかえてわが家にもどるのもひとつの方法だ。むかえの車がなくとも、交通システムの完備は住みやすさの一端をそれとなく感じさせてくれる。バンクーバーにもどれば、ロッキーはもう白くなっているだろうか。澄んだ空気に魚貝の料理が待っている。これらのイメージは、むろんふるさとを想う心情として誰もが持ち得るものにちがいないが、カナダ人が共通して答えた「住みやすさ」の意味を重ねて考えることによって、カナダの都市に対するもっと積極的な存在感をひきだすことができるように思われる。

実験的コミュニティづくり

一九七六年、バンクーバーでひらかれた国連人間居住会議ハビタートでは、「より住みやすい」人間居住の場を求めるための国際連帯が論議された。そのハビ

オフィス街の昼休み（オタワ）

モントリオール MONTREAL

モントリオールは、北米で「都市再開発」が最も成功した例としてよく引き合いに出される。ここでいう都市再開発（urban renewal）とは、古い建物を一掃した上で全く新しい町並みを作る方法である。

一九六〇年代の初め頃、モントリオール市には広大な鉄道線路がむき出しで姿をさらし、市内の景観を損っていた。そこでカナダ国鉄が中心となり、ニューヨークのディベロッパー、W・ゼッケンドルフと、I・M・ペイ、M・バンダーローらすぐれた建築家を迎えて総合的な再開発プロジェクトに取組んだ。全部で九ヘクタール近くを占める線路を地下にもぐらせ、その下には地下街を、上にはビルや広場を築くという、当時としては画期的な総合開発を実施した。そしてモントリオールは創意工夫を感じさせる美しい都市に変身していった。

一方、開発の波は、十八・九世紀に建てられた歴史的な建物にも押し寄せ、それらの建物は老朽化とともに消滅の一歩手前にあった。たとえば文豪チャールズ・ディッケンズが投宿していたラスコ・ホテルは簡易宿泊所に、愛国者ルイ・ジョセフ・パピノーの家は魚市場に、その他由緒ある家やビルが、倉庫や駐車場に変わっていった。

モントリオールでは、この趨勢を阻止する運動が、一応の成功を見ている。モントリオール市とケベック州は旧市内の大半を「歴史的建造物」に指定し、許可なしに取り壊しや改築を禁止する立法措置をとった。同時に市は、古びたマーケットを改修し、街路には石を敷きつめたり、ガス燈に似た街燈を設置したりした。

さまざまな壁画や彫刻が楽しめるメトロ構内

旧市街区は再び活気と情緒を取り戻した。

モントリオールの再建では、メトロ（地下鉄）も大きな役割を果たしている。その理由は、メトロが単なる足の利便にとどまらず、駅にさまざまな芸術的趣向をこらしているためである。各駅の設計は別々の建築家に腕を競わせ、構内には本格的な壁画や彫刻を配してある。ある批評家のいうように、モントリオールのメトロは「明かるい陽光が駅の地下通路までさし込み、次から次へと芸術作品に出会い、実に気持の良い所だ」。そして、それらが街全体の雰囲気作りに一役買っている。

主要なメトロ駅の周辺は、ホテル、銀行、オフィス、レストラン、映画館などが広場をはさんで集まり、いわばひとつのタウンを作っている。プラス・ビル・マリー、プラス・ビクトリアなどがそれである（プラスとは広場のこと）。これらの建物はすべて地下道で結ばれていて、雪や雨の日には一歩も〝外界〟にでなくてすむ。地下街自体が、さまざまな商店、レストラン、娯楽施設を擁する、また別個のタウンである。そしてメトロが、市内各所のプラスと地下街を結ぶ動脈となっている。こうした有機的な町づくりは、モントリオールの都市再開発計画の大きな特徴で、これによって同市のダウンタウンはここ十年ほどの間に一変したのである。

トロント TORONTO

カナダ最大の経済都市トロントは、中心部に壮観な高層ビル群がそびえている。その中にはシティ・ホール（ビルジョー・レベル設計）、トロント・ドミニオン・センター（M・バンダー・ロー設計）、ロイヤル・バンク・プラザ（ボリス・ゼラファほか設計）、メトロ図書館（レイモンド・モリヤマ設計）などといった名建築も含まれている。

だが、一九七三年にトロント市は、四十五フィート（十三・五メートル）をこえるビルの建設凍結（モラトリアム）を打ち出した。オンタリオ州はこの決定を無効としたが、市は依然として僅かの例外を除いて高層ビルの建設を認めていない。したがってトロントは、今日、高層建築の傑作が肩を並べる中心部と、それを取り巻く小じんまりと住みやすい近隣地区とが興味ある対照をなしている。

ダウンタウンにあるキャベッジタウンは、市のモラトリアムによって救われた街の一つだ。ここは、狭いが頑丈なレンガ造りの長屋式住宅が並び、ドアの上部にはステンドグラスがはまり、家の前のささやかな庭には花が咲き乱れているといった、ごく庶民的な街だった。それが一九六〇年代になるとスラム化しはじめ、一部取り壊されたりしたが、モラトリア